琉球大学学術リポジトリ

北魏孝荘帝代爾朱氏軍閥集団再論(4)　－王都－覇府体制を焦点にして－

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2010-06-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 長部, 悦弘, Osabe, Yoshihiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/17069

北魏孝荘帝代爾朱氏軍閥集団再論(4)
－王都－覇府体制を焦点にして－

長　部　悦　弘

序
第１章　爾朱氏軍閥集団の各地への派遣状況概観－赴任地・就任官
　第１節　覇府地区
　第２節　山西地域
　第３節　山東地域（以上『琉球大学法文学部紀要　日本東洋文化論集』第15号　2009年）
第２章　爾朱氏軍閥集団構成員の京官への任官状況と駐在地
　第１節　京官への任官状況
　第２節　京官就任者の実際の駐在地
第３章　在洛陽京官就任者の役割（以上『琉球大学法文学部人間科学科紀要人間科学』第23号　2009年）
第４章　覇府地区在駐の爾朱氏軍閥集団構成員
　第１節　在并州（晋陽）の京官就任者
　第２節　在肆州の京官就任者
　第３節　在僑州（恒・燕・雲・朔・蔚５州）の京官就任者
第５章　爾朱氏軍閥集団構成員の尊皇意識（以上『琉球大学法文学部人間科学科紀要別冊　地理歴史人類学論集』第１号　2010年）
第６章　覇府地区・京師洛陽・山西地域・山東地域間の連関構造
　第１節　行台設置地
　第２節　王都－覇府体制内に占める各地の比重
第７章　爾朱氏軍閥集団と漢族士人
結語－爾朱氏軍閥集団の王都－覇府体制と漢族士族（以上本号）

第６章　覇府地区・京師洛陽・山西地域・山東地域間の連関構造

第１節　行台設置地

爾朱氏軍閥集団構成員が各地に最初に配置された時期を、覇府地区（并州〔晋陽〕・肆州・恒州・燕州・雲州・朔州・蔚州・顕州）内の并州（晋陽）または京畿地区の京師洛陽を起点あるいは終点とする、各交通路線に依って整理すれば、以下の如くなる。（以下、孝荘帝代山西地域爾朱氏軍閥集団構成員官職就任者一覧表〔第Ⅳ表〕・孝荘帝代山東地域爾朱氏軍閥集団構成員官職就任者一覧表　〔第Ⅳ表〕参照）(1)

爾朱氏軍閥集団が本拠地たる覇府地区内の并州・肆州に構成員を配置した時期は、孝明帝代である。山西地域（太行山脈以西）の并州（晋陽）－洛陽路（太行山脈西麓南方東線）沿線地方の建州は、孝明帝代528年３月に爾朱栄が并州（晋陽）に軍を起こして、４月に洛陽に入るまでの間に、抑えた。建州は、并州（晋陽）と洛陽の中間点にある要衝の地であるが故に、司馬子如を建興郡太守に任じていち早く占拠した。（『北斉書』18司馬子如伝）他は孝荘帝代に構成員を配置したが、山西地域の洛陽－雍州－原州－涼州路沿線地方・洛陽－雍州－鄯州路沿線地方・洛陽－雍州－東益州路沿線地方、即ち関隴地方に爾朱氏軍閥集団が人員をはじめて送った時期が530年であったのを除くと、他は大体528年ないし529年である。

覇府地区・并州（晋陽）－洛陽路（太行山脈西麓南方東線）沿線地方以外の地方に爾朱氏軍閥集団構成員がはじめて派遣された時期は、山西地域と山東地域に分けて見ると以下の如くなる。山西地域は、并州（晋陽）－雍州路（太行山脈西麓南方西線）沿線地方では、晋州が528年４月・529年５月の間、華州が528年４月・10月の間である。

関隴地方では、洛陽－雍州－原州－涼州路・洛陽－雍州－鄯州路・洛陽－雍州－東益州路の３路線が通っていたとみられるが、３路線が重複している地点がある点に注意を払いながら、各路線の各州にはじめて爾朱氏軍閥集団構成員が派遣された時期をみると、以下の如くなる。洛陽－雍州－原州－涼州路沿線

地方では、雍州が530年２月、原州が530年６月、涇州が530年７月、涼州が530年２月・12月の間である。洛陽－雍州－鄯州路沿線地方では、岐州平秦郡が530年４月、鄯州が530年７月である。洛陽－雍州－東益州路沿線地方では、東益州が530年４月である。（３路線中、重複した地点は繰り返して記すのを避けた）

山東地域（太行山脈以東）は、幽州－洛陽路（太行山脈東麓線）沿線地方では、司州の汲郡が528年４月・10月の間、定州が528年10月、相州は529年５月、幽州は529年９月、殷州は528年４月・530年10月の間である。洛陽－徐州・東徐州路沿線地方では、徐州は徐州528年４月・530年９月の間、東徐州は529年７月・530年９月の間である。洛陽－広州路沿線地方では、広州が529年７月である。洛陽－南兗州路沿線地方では、南兗州が529年７月・９月の間である。

行台の機能は、設置された当該地方の都督・刺史・将軍を統轄することであった点から、当該地方における最高の行政・軍政に亘る統治機関であったと言ってよいであろうと前述した。爾朱仲遠が徐州刺史・尚書左僕射を兼任して統轄した三徐州大行台は、滎陽郡以東の税をすべて麾下の軍に入れて、京師洛陽には送らなかった。（『魏書』75爾朱仲遠伝・『北史』49同伝）(2) 三徐州大行台のみならず、他の行台も、爾朱氏軍閥集団が各地を治める上で、中心的役割を果たしていたと考えられる。恐らくその内実は、三徐州大行台と同様に、他の行台も管轄下の州郡から得た税収により養った駐屯軍を通して強力に統治したとみられる(3)。

爾朱氏軍閥集団が構成員が赴任した地方の中、孝荘帝代における行台の設置箇所は、以下の如くなる。（孝荘帝代在覇府地区爾朱氏軍閥集団構成員就任官職一覧表〔第Ⅰ表〕・孝荘帝代山西地域爾朱氏軍閥集団構成員就任官職一覧表〔第Ⅲ表〕・孝荘帝代山東地域爾朱氏軍閥集団構成員就任官職一覧表〔第Ⅴ表〕参照）(4)、山西地域では、河東地方・関隴地方の中、関隴地方は、孝荘帝代には設置されていない。河東地方では、覇府地区内で北道大行台、北道行台、并・肆・雲・恒・朔・燕・蔚・顕・汾九州行台が設置された并州州城（晋陽城）、覇府地区外で晋州行台が設置された晋州州城（白馬城）である。山東地域では、河北地方では定州大行台が設置された定州州城（安憙城）、相州行台が設置さ

れた相州州城（鄴城）、である。淮北地方では三徐州大行台が設置された徐州州城（彭城）、東徐州行台が設置された東徐州州城（下邳城）である。本拠地である覇府地区内部の并州州城（晋陽城）を除いて、爾朱氏軍閥集団が他の地域を治める拠点となったのが、行台を設けた晋州州城（白馬城）・定州州城（安憙城）・相州州城（鄴城）・徐州州城（彭城）・東徐州州城（下邳城）であろう。行台の設置箇所となった地は、以下のような特徴を備えている。

晋州州城（白馬城）は、北方の并州州城（晋陽城）から関中盆地に抜けていく途上に位置し、黄河と汾水を擁し、関中盆地を臨む地である[5]。

定州州城（安憙城）は、恒水が貫流し、北方に燕州・幽州が控えており、かつて後燕が386年から397年まで王都を置き、北魏は後燕から奪った後398年行台を設置し（『魏書』２太祖本紀　天興元年〔398〕春正月の条・『北史』１魏本紀１　天興元年〔398〕春正月の条・『魏書』15元儀伝・『北史』15同伝)、80000名の兵士を配して多数の軍府を置いた。(『魏書』58楊椿伝・『北史』41同伝)[6] 宣武帝代には禁軍を掌管していた于忠を高肇が煙たく思い、「中山は要鎮である」と称して定州刺史に出そうとしたこともあった。(『魏書』31于忠伝)即ち宣武帝代においても定州中山は要衝地であると、認識されていたのである。

相州州城（鄴城）は、周知の如く、戦国時代に魏の西門豹が黄河から12本の灌漑用水路を鑿ち（『史記』126　西門豹伝)、その後同じく魏の史起が鄴城を貫流する漳水から農業用水を導いた（『漢書』29　溝洫志)。後漢末204年には曹操が現在の河南省浚県において淇水を引き、そこを起点に東北方向に向けて、太行山脈と南北に並行した形に、白溝という運河を開いた。(『三国志』１　武帝本紀　建安９年〔204〕正月の条）213年には、漳水と白溝を結ぶ利漕渠を開鑿して、水上交通路網を編んで、鄴をその一端に組み込んだ。(『三国志』１武帝本紀　建安18年〔213〕９月の条)[7]

相州州城（鄴城）は、後漢末以来北魏までの間に、幾度も有力な政治勢力の根拠地が築かれたり、あるいは王都・陪都としての地位を享受してきた。後漢末には河北の英傑袁紹が191年に冀州牧に就いて以来、拠点を構え、ついで曹操が200年に官渡で袁紹に勝利した後、204年に攻略して拠点を建設し、曹魏では王都洛陽に加えて、譙・許昌・長安とともに陪都の１として五都を構成し

た[8]。五胡十六国時代には後趙（335～350）（（　）内の数字は、奠都期間を示す。以下、同じ）（『晋書』106石季龍載記上）・冉閔（350～352）（同書107冉閔載記）・前燕（357～370）（『晋書』110慕容儁載記）が王都を置いた[9]。

北魏代に入ってからは、繰り返し奠都地の候補に上った。道武帝が太行山脈東麓一帯から後燕の勢力を駆逐した後、398年に巡幸した折り、実行にまでは至らなかったが、相州州城（鄴城）への定都も考えた。結局、行台を設置しただけで落ち着いた。（『魏書』２太祖本紀　天興元年〔398〕春正月の条）明元帝代415年には凶作に見舞われたので、太史令王亮・蘇垣が明元帝に飢饉対策として農業生産物の多く集まる相州州城（鄴城）への遷都を建議した。（『魏書』35崔浩伝・『北史』35同伝）相州州城（鄴城）は、華北の農業生産地帯の中にあり、食糧の集積地であったが故に、かかる提言がなされたのであろう。孝文帝が493年に平城から洛陽へ遷都する際に、同年９月に洛陽に最初に入った後、翌10月に鄴城に入り、翌494年正月に再び洛陽に向かうまで滞在した。その間11月に遷都行を起こすと同時に起工して完成した鄴城西の宮殿に赴き、翌正月にはその澄鸞殿で群臣を朝した。（『魏書』７下高祖本紀下　太和17年〔493〕・太和18年〔494〕の条・『北史』３魏本紀３　太和17年〔493〕・太和18年〔494〕の条）また494年には、実現は見なかったが、御史大夫崔吉らが「鄴城は平原千里にして、運漕四通なり。西門（豹）・使起（＝史起）の旧迹有り」と、その交通路線上四通八達の地である点と農業生産設備として西門豹・史起の手になる灌漑用水路が旧迹として存在している点など、交通上及び農業生産上の利点を備えていることを挙げて、孝文帝に都を置くよう勧めた。（『太平御覧』156州郡部２　叙京都下）[10] 相州州城（鄴城）は、かく北魏代には、道武帝代・明元帝代・孝文帝代において君臣間で遷都の候補地として再三議論の俎上に上ったり、あるいは洛陽遷都前に孝文帝の一時的逗留地に選ばれるほど、重んぜられていた要地である[11]。

徐州州城（彭城）は、汴水と泗水の合流点に位置し、かつて秦漢交替期には項羽が拠点を構えた。六朝時代に入ってからは、華北・江南に成立した国家にとり、いずれが占領しても、相手に対抗する上で淮北地域で最大の軍事拠点となった。北魏・宋が並立していた時代には、献文帝代466年に宋の徐州刺史薛

安都が北魏に内属して以来、宋から北魏の版図に入った。(『魏書』６顕祖本紀天安元年〔466〕９月の条）薛安都に呼応して北魏が派遣した尉元は467年に、彭城は宋の要藩であり糧食を蓄積し防衛線を広げれば、宋が淮北を窺うことは防げると発言している。(『魏書』50尉元伝）481年には徐州刺史薛虎子が徐州は土壌が肥沃で清水（泗水の下流部分）・汴水が流れており、十分灌漑が可能であり、駐屯兵士の半数を農業に従わせれば、糧食が十分備蓄でき、飢寒に曝されていた駐屯兵士を救い、且つ江南を呑み込むことができると訴え、孝文帝に受け入れられた。(『魏書』44薛虎子伝)[12]

東徐州州城（下邳城）は、徐州州城（彭城）より泗水の下流に位置し、泗水と沂水の合流点を占め、南北両方向から来る進行軍の通過点であり、江南・華北の南北両国家間の軍事上の争奪地であった。南北移動過程の、水上交通・陸上交通両路の結節点でもある。即ち江南から華北へ移動する場合、水上交通から陸上交通への転換点、逆に華北から江南へ移動する場合、陸上交通から水上交通への転換点として、機能した。東晋安帝代409年劉裕（のちの宋武帝）は南燕遠征に際し、４月に水軍にて建康を発ち、淮水を上って泗水に入り、５月に東徐州州城（下邳城）に至って、艦船と輜重を置いて、陸上路を辿って琅琊に向かい、６月にはさらに北上して臨朐城を攻陥した。(『宋書』１武帝本紀上義熙５年〔409〕４月・５月・６月の条）翌410年２月には南燕主慕容超の立て籠もる広固城を屠って、南燕を平定した。(『宋書』１武帝本紀上　義熙６年〔410〕２月丁亥の条）帰路は、東徐州州城（下邳城）に戻って、輜重を艦船に載せ、自身は陸路を南下し、４月に建康に帰着した。尉元は徐州州城（彭城）が帰属した翌467年に、宋軍が徐州州城（彭城）に向かう際、必ず清水並びに泗水を経由して宿豫を過ぎて東徐州州城（下邳城）を経、青州に赴くに際しては、東徐州州城（下邳城）を経由し、沂水に沿って琅琊郡北方の東安郡城を通過するので、もし先に東徐州州城（下邳城）を平定し、宿豫を制圧し、淮陽に軍を置き、東安郡郡城を守れば、青州・冀州の諸鎮は攻めなくとも落ちるだろうと上表している。(『魏書』50尉元伝)[13]

以上、爾朱氏軍閥集団が本拠地覇府地区から構成員を王都洛陽をはじめ、山西地域（太行山脈以西）では并州（晋陽）－洛陽路（太行山脈西麓南方東線）

・并州（晋陽）－雍州路（太行山脈西麓南方西線）・洛陽－雍州－原州－涼州路・洛陽－雍州－鄯州路・洛陽－雍州－東益州路、山東地域（太行山脈以東）では幽州－洛陽路（太行山脈東麓線）、洛陽－徐州－東徐州路、洛陽－南兗州路、洛陽－広州路に派遣したことを交通路線に従って見た。その中で同軍閥集団が行台を設けたのは、晋州州城（白馬城）・定州州城（安憙城）・相州州城（鄴城）・徐州州城（彭城）・東徐州州城（下邳城）である。晋州州城（白馬城）は太行山脈西麓の并州（晋陽）－雍州路、定州州城（安憙城）・相州州城（鄴城）は太行山脈東麓の幽州－洛陽路線、徐州州城（彭城）・東徐州州城（下邳城）は洛陽－徐州－東徐州路の、各路線において要地を占めたのである。爾朱氏軍閥集団は構成員を派遣した地方の中で、とりわけ、并州（晋陽）－雍州路（太行山脈西麓南方西線）・幽州－洛陽路（太行山脈東麓線）、洛陽－徐州－東徐州路などの交通路線上の要所となる都市に行台を設置して当該地方に支配力を及ぼそうとしたと考えられる。

第２節　王都－覇府体制内に占める各地の比重

山西地域の并・肆・雲・恒・朔・燕・蔚・顕・汾９州（雲・恒・朔・燕・蔚・顕６州は僑州）は覇府地区に属し、爾朱氏軍閥集団の最本拠地であり、同軍閥集団にとり、山西地域内部はもとより、北魏の全領域内部で最重要地区である。

京師洛陽は、宗室元氏出身の皇帝が居住し、北魏の領域支配の中心的役割を果たしてきた中央機関が存在するが故に、爾朱氏軍閥集団の政治権力を正当化し、且つ領域支配を具体的に実行する上で不可欠の地であり、覇府地区と並ぶ最重要地である。爾朱栄は本拠地である覇府地域の并州（晋陽）に孝荘帝を洛陽から迎えて遷都することを望んだ。爾朱栄は528年４月に河陰の変を起こした直後、孝荘帝を戴いて入洛する直前には并州（晋陽）へ遷都する腹積もりであり、入洛した直後もかかる念を捨てず抱き続けていた（『北史』48爾朱栄伝）。洛陽の人々も河陰の変直後であり、爾朱氏軍閥集団の兵員が掠奪を恣にするだろうと予想すると同時に、爾朱栄が并州（晋陽）への遷都を目論んでいると噂し、遁走した（『魏書』74爾朱栄伝）。事実、入洛後爾朱栄は孝荘帝に并州（晋陽）への遷都を正式に希望した。しかしながら宗室の元諶の強い反対に遭い、

河陰の変を引き合いに出して殺害を仄めかして恫喝したが、それでも屈服させることが出来ず、断念した（『北史』19元諶伝）。孝荘帝は政務に熱心で、しばしば冤獄を処理し、訴訟を自ら見た。また吏部尚書の李神儁と選挙を規定通りに行おうとした。だが爾朱栄は、これを嫌った。また北人を河南諸州の刺史に任命しようと試みて、孝荘帝に拒否され、憤った。自らの意志で政事に関わろうとする孝荘帝を自身の近くに置いて完全に支配しようと目論んだ。それ故遷都への思いは断ちがたく、その後酔いに任せて、孝荘帝を連れて、洛陽遷都以前の北魏皇帝陵である金陵を拝謁した後、恒州・朔州に戻ると述べて遷都を仄めかす度に、信任していた侍中の朱瑞が尚書から孝文帝代の洛陽遷都の故事を探し求めた。そこで遷都の話が蒸し返されるようになった。（『北史』48爾朱栄伝）530年９月に爾朱栄が暗殺される直前、最後の上洛時に元天穆とともに孝荘帝に従って西林園に入って宴を催して射的に興じた折り、爾朱栄が『近頃侍官は皆軍事に慣れておりません。陛下は500騎を率いて獵に出られてその機を利用して訴訟を処理された方が宜しいかと存じます。』と上奏した。これに先立って爾朱氏軍閥集団から洛陽に派遣されていたが孝荘帝に忠誠を誓った奚毅が、爾朱栄が獵に託けて、孝荘帝を連れて遷都しようとしていると孝荘帝に告げていた。爾朱栄の発言は果たして奚毅の予言に合致するものであった。しかしながら結局のところ爾朱栄は自身の統率する爾朱氏軍閥集団の本拠地である并州（晋陽）への遷都を実現できなかった。その結果、爾朱栄の生前、洛陽の孝荘帝及びその支持者との緊張を孕みながら、并州（晋陽）を中心とする覇府地区と王都洛陽を中心とする京畿地区を２大支点として王都－覇府体制が樹立され、維持されたのである。さらにかれの死後も爾朱氏軍閥集団が532年に高歓により洛陽から駆逐されて政権の座から落ちるまで存続したのである。

王都－覇府体制の２大支点たる并州（晋陽）と京師洛陽とは、爾朱氏軍閥集団にとり、覇府地区と京畿地区の各中心地として最も枢要な位置を占めた。即ち、爾朱氏軍閥集団は并州（晋陽）－洛陽路（太行山脈西麓南方東線）を中心軸として、領域支配体制を構築したと考えられる。同体制の中で先ず覇府地区に隣接する地区である并州（晋陽）－雍州路（太行山脈西麓南方西線）上の晋州、中心軸である覇府地区と王都洛陽を結ぶ并州（晋陽）－洛陽路（太行山脈

西麓南部東線）上の建州が、覇府地区と王都洛陽に次いで重要な地点である。晋州には前述した如く行台が設置され、建州は覇府地区と京畿地区との間の中間点である。これらは、いずれも覇府地区に隣接する山西地域である。

以上検討した地方の晋州・建州に次いで重要な地域を、王都－覇府体制を支える中心軸である并州（晋陽）－洛陽路（太行山脈西麓南方東線）からの距離と行台設置地という点から、山東地域内の幽州－洛陽路（太行山脈東麓線）沿線地方・洛陽－徐州－東徐州路沿線地方・洛陽－南兗州路沿線地方・洛陽－広州路沿線地方の中から考えてみよう。

先ず洛陽東方及び南方に眼を向けると、洛陽－徐州－東徐州路沿線地方・洛陽－南兗州路沿線地方・洛陽－広州路沿線地方の中で行台が設けられたのは、洛陽－徐州－東徐州路沿線地方のみである。（孝荘帝代山東地域爾朱氏軍閥集団構成員就任官職一覧表　〔第Ⅴ表〕参照）[14] 洛陽－東徐州路沿線地方には、先に見た如く、淮北の徐州州城（彭城）に三徐州大行台が設置され、東徐州州城（下邳城）に東徐州行台が設置された。かく大行台・行台が設置された点に照らして、洛陽－徐州－東徐州路沿線地方が以上の３路線中最も重視されたと見て良いであろう。同路線に設けられた大行台・行台の中、東徐州行台は樊子鵠が東徐州刺史元大賓を害して反乱を起こした呂文欣を討伐する際に、長官に任命されて530年正月から530年２月までの２ヶ月程度存置されたにしか過ぎない。これに対して、三徐州大行台は爾朱仲遠を長官として528年４月以後から531年２月まで２ヶ月以上に亘って設置されたとみられる。（孝荘帝代山東地域爾朱氏軍閥集団構成員官職就任者一覧表　〔第Ⅵ表〕参照）[15] 滎陽以東の税収は京師洛陽に送ることはなく、すべてその配下の軍に入れた。（『魏書』75爾朱仲遠伝）上記の期間、三徐州大行台は爾朱氏軍閥集団の滎陽以東最大の拠点として機能したと考えられる。かく爾朱仲遠が三徐州大行台として洛陽－徐州－東徐州路沿線地方を支配したとは言え、その設置地は幽州－洛陽路（太行山脈東麓線）沿線地方に比べて并州（晋陽）を中心とする覇府地区と洛陽を核とする京畿地区から遠い。両地区から最も近いのは、晋州・建州を除けば、幽州－洛陽路（太行山脈東麓線）沿線地方である。洛陽－徐州－東徐州路沿線地方は、

江南梁朝に臨む淮北最大の軍鎮徐州州城（彭城）、対江南政権の最前線基地である東徐州州城（下邳城）を抱えていたとはいえ、爾朱氏軍閥集団の領域支配体制内において占める比重は幽州－洛陽路（太行山脈東麓線）沿線地方には及ばないであろう。幽州・定州・殷州・相州・司州に人員を派遣したことは先に見たが、同地方は、なかでも定州には大行台を置き、相州には行台を設けており、重視したことが窺える。定州・相州のいずれも、覇府地区に隣接する地方である。孝荘帝代に限って、爾朱氏軍閥集団による定州大行台と相州行台の設置期間を比較すると、定州大行台は528年10月に侯景が葛栄を捕捉した功績により長官に就任してから孝荘帝が死去する528年12月までであり（『梁書』56侯景伝）、これに対して相州行台は爾朱世隆が529年５月から529年７月まで長官に在任した２ヶ月間にしか過ぎなかった。（『魏書』75爾朱世隆伝）かかる設置期間の長短から、定州が相州よりも、さらには幽州－洛陽路（太行山脈東麓線）沿線地方、ひいては山東地域全体の中で最も重要視したことが読み取れる。定州に配置した爾朱氏軍閥集団構成員を確認すると、以下の如くなる。

定州に駐屯した侯景は孝荘帝代528年４月に爾朱氏軍閥集団が第１次上洛を果たした後に帰属したが、同年10月に葛栄を生け捕りにして葛栄集団を平定する上で多大な功績を挙げたことにより、懐朔鎮功曹史から定州大行台・定州刺史に大抜擢された。侯景が定州に駐屯した時期は何時までかは確定できないが、少なくとも528年10月に定州大行台・定州刺史に任ぜられて以来、孝武帝代532年１月に高歓が爾朱氏を最終的に覆滅した後、高歓に降るまで爾朱氏軍閥集団の構成員として定州を守った（『梁書』56侯景伝・『南史』80同伝）[16]。定州には、侯景に加えて、賀拔勝が、爾朱栄が葛栄集団を殲滅した後も降ることなく依然として薊城に屯拠していた葛栄の別将の韓楼・郝長等を燕州刺史侯淵とともに攻撃した後、528年12月に定州大都督に任命されて、529年５月に洛陽を侵した元顥を討伐するために爾朱栄に招集されるまで侯淵とともに定州に駐留した。賀拔勝が定州を離れた後も、侯淵は529年９月に韓楼を薊城から最終的に排除して、平州刺史・平州大都督を兼任して薊城に移るまで、定州に留まった（『魏書』80賀拔勝伝・『周書』14同伝・『北史』49同伝・『魏書』80侯淵伝）侯景は、兵法を爾朱氏軍閥集団構成員の慕容紹宗に学んだが、間もなく逆に慕容

紹宗から兵法について相談を受けるようになるほど（『南史』80侯景伝）、兵法に通じ、実戦においても上述した如く葛栄を捕捉するという勲功を挙げて戦闘能力の高さを証明した。賀拔勝は騎射に優れ、北魏の北辺において皆その胆略を推賞したとされる。懐朔鎮において父賀拔度拔、兄賀拔允、弟賀拔岳とともに押し寄せてきた衛可孤の率いる反乱集団を防いで奮戦し、次いで父賀拔度拔の死後朔州に兄弟共々身を寄せ、朔州刺史の費穆にその才略を大いに買われて、遊騎となり、五原において破落汗拔陵に包囲されていた元淵の下で軍主となり、朔州へ向けて撤退する際、殿を勤めた。その後、恒州（旧平城）において元纂に従ったが、間もなく恒州が反乱勢力の手に落ち、兄弟は生き別れとなった。賀拔允と賀拔岳は一足早く爾朱栄の許に身を投じ、賀拔勝は肆州に逗留した後、遅れて爾朱栄の傘下に入った。爾朱栄は賀拔氏３兄弟を揃って麾下に得て、「天下は平らぐるに足らず」（『周書』14賀拔勝伝）・「天下は定むるに足らず」（『北史』49同伝）と喜んだ逸話から、武人として高く評価されていたことが窺える。侯淵は葛栄と滏口において戦った折り、最も勲功を挙げたとされる。（『魏書』80侯淵伝・『北史』49同伝）定州に配置された侯景・賀拔勝・侯淵の３人は、いずれも武勇に優れた人物であった。ただ侯景は528年４月に爾朱氏軍閥集団が第１次上洛を果たした後に服属してから、１年足らずと、日が浅かった故に、528年４月の上洛前より爾朱氏軍閥集団に加わり、より信頼の置ける賀拔勝・侯淵を配して定州を抑え込んだと見られる。

定州の南には、殷州が隣接していた。殷州の西には、山西と山東の間に位置する太行八陘の１である井陘があった[17]。さらにその西方には、爾朱氏軍閥集団の本拠地である覇府地域の并州の晋陽があった。晋陽の東方にある井陘は、530年４月に爾朱氏軍閥集団がまだ上洛する以前、さらには孝荘帝代530年９月に山東地域に猖獗を極めた葛栄集団を鎮定して同地域を抑える以前、孝明帝代において、同軍閥集団にとり、爾朱栄の「井陘は険要にして、我が東門なり」と言う発言に見るが如く、覇府地域の東を守る要地であり、関門であった。当時爾朱栄はかく発言して、賀拔勝に歩兵・騎兵5000名を授けて、駐屯させた。（『周書』14賀拔勝伝・『北史』49同伝）爾朱栄のかかる発言は、定州の中山城を杜洛周集団の後を承けて生まれた葛栄集団が、相州の鄴に迫ろうとし、爾朱

氏軍閥集団の構成員を太行山脈東麓線上の地に配置する以前の時期に成されたものである。(『魏書』74爾朱栄伝・『北史』49同伝) 当時、爾朱氏軍閥集団の構成員を直接派遣できる東の限界点が、井陘であった。殷州は行台を設けてはいなかったが、并州の晋陽から井陘を経由して山東地域の平野部に最初に出る、太行山脈東麓線上の要衝であった。山東地域に蟠踞していた葛栄集団を排除した後、爾朱氏軍閥集団構成員が殷州に派遣が可能となった。最初に殷州刺史に任命された同軍閥集団構成員は、王椿である。王椿は、孝荘帝代に528年４月以後に太原郡太守から華州刺史を経て就任し(『魏書』93王椿伝)、元曄が即位する530年10月まで在任していた。王椿の後は、樊子鵠が530年２月に呂文欣を東徐州において平定した後、一旦洛陽に戻って、殷州刺史に任命され、530年９月の爾朱栄の死後、530年12月に爾朱兆に拉致・殺害される以前の孝荘帝に豫州刺史に任ぜられるまで、殷州に留まって居た。(『魏書』80樊子鵠伝・『北史』49同伝) 王椿は、後述する如く、妻魏氏(鉅鹿郡魏悦の次女)は、爾朱栄の妻元氏(北郷郡長公主)から深く礼敬されたことから(『魏書』93王椿伝・『北史』92同伝)、爾朱栄から信任されていたことは確かであろう。樊子鵠は殷州に出る前には、洛陽に滞在していた。洛陽駐屯時には、爾朱栄から京師の事を任せられたほど、深い信頼を受けていた。(『魏書』80樊子鵠伝・『北史』49同伝) 殷州にも爾朱栄の信のおける構成員を配置して、固めた。即ち殷州もまた定州に劣らず、爾朱氏軍閥集団にとり、太行山脈東麓線上の重要な位置を占めていたと見られる。

并州(晋陽)を中心とする覇府地区と洛陽を中心とする京畿地区は、軍事上山東・山西に対して犄角の構えを形成したと認められる。両地区により形作られた犄角の構えがとりわけ働いたのは、山東地域において猖獗を極めた葛栄集団を528年９月に殲滅した時であろう。葛栄集団は平定されるのに先立つ１ヶ月前相州州城(鄴城)を包囲していたが、京畿地区の王都洛陽からは元天穆が軍を率領して朝歌の南に駐屯し、爾朱栄は覇府地区の并州(晋陽)から出撃し、これを挟撃しようとした。即ち、528年９月、覇府地区の并州(晋陽)の爾朱栄が左軍を担い、京畿地区の洛陽に居た元天穆・楊椿・穆紹が各々前軍・右軍・後軍を構成して、相州の鄴城を包囲する葛栄集団を挟撃しようとした。結局葛

栄集団は、洛陽から元天穆が率領した三軍が攻撃を加える前に、爾朱栄の統率する左軍により滏口において潰滅したのであった。(『魏書』10孝荘帝本紀　建義元年〔530〕８月・９月の条、『北史』５魏本紀５）相州州城（鄴城）を包囲した葛栄集団を討滅した際に見られる如く、覇府地区からは爾朱栄が軍を率領し、京畿地区からは元天穆が軍を主導して双方向から攻撃を加えようとした軍事行動から、爾朱氏軍閥集団は、最重要地区である覇府地区・京師洛陽に加えて、山西では覇府地区の隣接地晋州、中心軸上の中継点建州を押さえて覇府地域及び中心軸を固め、山東に対して覇府地区と京畿地区とで掎角の構えを立てた。さらに山東に対して定州を重点地として幽州－洛陽路線を扼え、その領域支配体制を強化したと思われる。恐らく爾朱軍閥集団の領袖爾朱栄にとり、山西の太行山脈西麓の并州（晋陽）－洛陽路線に次いで、覇府地区に隣接する太行山脈東麓の幽州－洛陽路線を如何に掌握し、さらにそこから広がる山東地域を如何に支配するかが大きな関心事であったと考えられる。吏部尚書李神儁に正式に申請する前に独断で定州中山郡に属する曲陽県令を補授したり、胡族出身の爾朱氏軍閥集団構成員を河南諸州刺史に任命するよう孝荘帝に上奏して軋轢が生じても強引に押し切ろうとしたりしたのは、その表れであろう。(『魏書』74爾朱栄伝・『北史』48同伝)

山西でも、関中には、爾朱氏軍閥集団構成員が派遣された時期が、山西の覇府地区及び隣接地区に比べて晩い。爾朱天光が孝荘帝代530年に万俟醜奴討伐のために派遣されるまで、王椿が派遣された可能性が高い。年代は確定できないが、関中の華州刺史に任命された可能性が否定できない。(孝荘帝代山西地域爾朱氏軍閥集団構成員官職就任者一覧表〔第Ⅳ表〕)[18] しかしながら爾朱天光が遠征した時にはじめて爾朱氏軍閥集団の手が本格的に及びはじめたと言ってよいであろう。ただ、爾朱栄の生前、孝荘帝代にはまだ行台が設置されてはおらず、爾朱栄の死後、前廃帝代に至って爾朱天光が関西大行台に任命され、やっと爾朱氏軍閥集団が統轄する行台が設置された。(『魏書』75爾朱天光伝・『北史』48同伝）孝荘帝代においては、爾朱氏軍閥集団はまだ本腰を入れて関中を抑えていなかったのである。

爾朱氏軍閥集団の領域支配体制は、山西地域の覇府地区（并州・肆州・汾州、

雲・恒・朔・燕・蔚・顕僑州も含む）の中心并州（晋陽）と京畿地区の核である京師洛陽の２大中心地を結ぶ、太行山脈西麓の并州（晋陽）－洛陽路線を基軸に据えて、太行山脈東麓の幽州－洛陽路線がそれに次ぐ重要な路線として骨格を構成していたと考えられる。

第７章　爾朱氏軍閥集団と漢族士人

先に爾朱栄を領袖とする爾朱氏軍閥集団が孝荘帝を頂点する尊皇体制を樹立したことは、述べた[19]。後年爾朱氏軍閥集団を離れた高歓が山東の漢族士人を糾合して、後廃帝を立てることにより前廃帝を擁していた爾朱氏に対して別個の尊皇体制を敷いて反旗を翻して、爾朱氏を中核とする爾朱氏軍閥集団主導の尊皇体制を覆し、そして爾朱氏を滅亡に追い込んだ。北魏末期において、爾朱氏軍閥集団、反爾朱氏軍閥集団のいずれの立場を取るにせよ、元氏を天子に頂く尊皇体制を打ちたてることは政権の正当性を主張する上で必須の事柄であった。とくに高歓が山東の漢族士人を結集するに際して、尊皇意識に訴えかけたことは決定的な役割を果たしたと考えられる。

本章では、尊皇と言う事柄を媒介に爾朱氏軍閥集団と漢族士人との関係を考察することとする。先に爾朱氏軍閥集団が孝荘帝を頂点する尊皇体制を樹立したことは、述べた。だがその一方でその領袖爾朱栄がとくに人事を巡って孝荘帝と対立したこともみた。さらに爾朱氏軍閥集団が、孝荘帝が爾朱栄を暗殺した直後、孝荘帝を支持して離反する者を出したが、かかる中で爾朱氏は爾朱世隆・爾朱兆をはじめ孝荘帝の懐柔策にも応ぜず、元曄を帝に擁立して、頑強に反抗し、結局孝荘帝を倒したこともみた[20]。

爾朱氏軍閥集団と漢族士人との関係を検討するために、とりわけ生前孝荘帝との間に軋轢を生じたその領袖爾朱栄、さらに孝荘帝に降ることを肯んぜず、反抗的な態度に終始した爾朱氏と漢族士族との関係に着眼することとしよう。爾朱栄が528年４月に上洛してから530年９月に暗殺されるまでの両者の関係は、河陰の変前後と爾朱栄の暗殺時に焦点を当てると、対立的様相が前面に浮かび上がって来る。

爾朱栄は最初の上洛以後敵対する可能性のある漢族士人、なかでも山東士人を中心に晋陽に監禁して、叛逆する芽を摘もうとした。爾朱栄が晋陽に拘置した士人は、河東郡の薛脩義、渤海郡の高昂、趙郡の李裔・李無為（李景遺の兄）である。李無為は、李裔の一族である。李無為が晋陽に収監されるに至った経緯は不明であるが（『魏書』36李裔伝・『北史』33同伝）、彼以外の３名が捕捉された経緯は、以下の通りである。薛脩義は、龍門鎮将であった527年10月に宗人の薛鳳賢とともに河東郡で反乱を起こして、同時期に雍州で反旗を翻した蕭宝夤に呼応したが、結局北魏にすぐに投降した。爾朱栄により「豪猾にして反覆す」と言う理由で、晋陽に録送された。（『北斉書』20薛脩義伝・『北史』53同伝）高昂（高敖曹）は、前述した如く、爾朱栄により通直散騎侍郎を解かれた後、給事黄門侍郎兼武衛将軍を罷免された兄高乾とともに郷里に帰り、郷里で陰かに壮士を養った。これを嫌った爾朱栄の命を受けた冀州刺史元嶷（元仲宗）に捉えられ、晋陽に送られた。（『北斉書』21高昂伝・『北史』31同伝）趙郡の李裔は防城都督として定州州城に籠城した後、包囲した杜洛周集団に投降した。その後杜洛周団を吸収した葛栄集団に転じ、爾朱氏軍閥集団に同集団が殲滅されると、爾朱栄に晋陽に囚われた。（『魏書』36李裔伝・『北史』33同伝）爾朱栄は530年９月に最期を迎えることとなる上洛の際も、彼等を帯同した。（『魏書』36李裔伝・『北史』33同伝）薛脩義及び高昂は、ともに爾朱栄の最後の上洛時に連行されて駝牛署に拘禁された。（『北斉書』20薛脩義伝・『北史』53同伝、『北斉書』21高昂伝・『北史』31同伝）李裔並びに李無為は爾朱栄により洛陽へ拉致されてきたが、その拘禁箇所は史乗に明記されていない。しかしながら薛脩義と高昂と同様に、ともに駝牛署に監禁されたと推察される。爾朱栄に拘束された薛脩義・高昂・李裔・李無為の４名はいずれも、爾朱栄の死後洛陽において釈放されるまで無位無官のままに置かれた。

爾朱栄と孝荘帝とは周知の如く、対立が頂点に達して前者が後者の凶刃に罹って倒れて両者の関係が終息する。暗殺計画を立てて実行した中心人物の中には、胡族では宗室元氏出身である元徽・元羅が認められるが（『北史』48爾朱栄伝）、かれらとともに漢族士人も加わっていたことが確認される。計画・実行に加担した漢族士人は、隴西郡の李彧・李義邕、弘農郡の楊侃、中山郡の李晞（＝李

侃晞)、太原郡の温子昇である。(『魏書』83下李彧伝・『北史』100序伝、『魏書』39李詠伝、『魏書』58楊侃伝・『北史』41同伝、『魏書』83上李侃晞伝・『北史』80同伝、『魏書』85温子昇伝・『北史』83同伝)　爾朱栄の死後、洛陽に駐在していた爾朱世隆は孝荘帝に降ることを潔しとせず、一旦洛陽から強行突破して離れた後、再び攻め寄せてきた。爾朱氏の洛陽脱出時と来襲時に積極果敢に抵抗に努めたものの中に、漢族士人が認められる。その代表的な１人が、高道穆(＝高恭之)である。爾朱栄の暗殺後、高道穆(＝高恭之)は孝荘帝の意を受けて、赦書を宣言した。これは、爾朱氏軍閥集団に向けられたものであろう。爾朱栄暗殺後、洛陽城の大夏門の北において、爾朱世隆等の率いる部隊との交戦を督戦し、李苗の河橋を破壊して爾朱氏の軍を防ぐ計に賛同した。その後爾朱世隆が爾朱兆の援軍を得て再度洛陽に侵攻すると、孝荘帝に忠実であったという理由で害された。(『魏書』77高恭之伝・『北史』50同伝)

前述した爾朱栄により晋陽から洛陽へ拉致された４人の中にも、孝荘帝に左袒して戦ったものが見出せる。４人は、爾朱栄暗殺後、孝荘帝の手により釈放された。それまで４人とも無位無官であったが、その中薛脩義と高昂は間もなく官を授与された。薛脩義は爾朱栄暗殺直後、孝荘帝により弘農・河北・河東・正平４郡大都督に任ぜられた。(『北斉書』20薛脩義伝・『北史』53同伝)とりわけ、高昂は爾朱栄の死後、解放されて孝荘帝に引見されて労われ、孝荘帝が宮殿に迫ってきた爾朱世隆の軍を迎えて大夏門で直接指揮した抗戦軍に参じて奮戦し、直閤将軍に除せられた。(『北斉書』21高昂伝・『北史』31同伝)兄高乾も爾朱栄の死後洛陽に馳せつけ、河北大使に任ぜられて、兄弟で郷里に帰って反爾朱氏の兵を募ることとなった。(『北斉書』21高乾伝・『北史』31同伝)高乾と高昂は、父高翼とともに高歓が後に531年６月に信都において反爾朱氏の旗を掲げて挙兵する際に、参加した。(『北斉書』21高昂伝・『北史』31同伝)

以上孝荘帝代における爾朱栄と漢族士人との対立関係を見たが、かかる点に専ら注目すると、爾朱栄と漢族士人との関係は、対立一色の観がある。しかしながら、それは物事の一面を極めて単純化した見方にしか過ぎない。爾朱栄と漢族士人との関係を仔細に眺めると、敵対関係に陥らず、むしろ逆に良好な関係を結んだものすら認められる。我々はかかる例を爾朱氏軍閥集団の本拠地で

ある覇府地区内の并州（晋陽）において、見出すことができる。それが、太原郡晋陽県の名族王氏出身を自称する王椿及び王綽である。王椿は、８世祖が王横、曾祖父が不明、祖父が王橋、父が王叡、兄が王襲である。孝文帝代秘書中散を拝したが、481年父王叡が亡くなると、官を去った。その後羽林監・謁者僕射を経て、宣武帝代504年に中散を拝した後、太原太守に出た。その後、事に坐して免ぜられた。爾来野に在ったが、孝明帝代525年、汾州の山胡劉蠡升が反乱を起こし、天子を自称し、官僚を置くと、汾州に隣接する并州に居た王椿は詔を受けて都督に任命され、汾州胡を慰労し、その声望に服して汾州胡は投降した。反乱鎮静後、再び太原太守に就けられた。王椿に都督を加えて汾州胡を慰労するよう上表したのは、爾朱栄に他ならない。王椿と爾朱栄と接点を持ったのは、その頃であろう。爾朱栄を頭領とする爾朱氏軍閥集団は、前稿で述べた如く、524年六鎮の乱が起きた直後に誘発されて次々と起きた、秀容郡を囲む肆州・并州・汾州・恒州（旧都平城周辺）の反乱を鎮圧し、526年から528年までの間に、太原郡を含む并州を支配下に収め、晩くとも528年までには并州・肆州に一大勢力圏を樹立した[21]。王椿は爾朱栄が肆州及び并州に勢力圏を築く過程で関係を持ち、太原太守として并州に居るようになった。そして528年に孝荘帝を擁立した功績により、遼陽県開国子に封ぜられ、食邑三百戸を与えられ、ついで真定県開国侯に封ぜられ、食邑七百戸を授けられたのである。爾朱栄は王椿が太原太守であった時に郡衙を設けた第宅に住んで、そして太原王に封ぜられたとされる。（『魏書』93王椿伝・『北史』92同伝）爾朱栄が王椿宅に移り住んだ時期と太原王に封ぜられた時期と、時間の先後関係を比べると、王椿の第宅に居住した後に、太原王に封ぜられたとみられる。その第宅は并州太原郡晋陽県にあったことは確かであろう。爾朱栄は、528年４月に孝荘帝を位に即けた直後、洛陽に入る直前に太原王に封ぜられた。爾朱栄が528年３月第１回目の上洛の軍を起こして、同年４月に孝荘帝を位に即けた直後、入洛直前の528年４月に太原王に封ぜられたことからみて、太原王に封ぜられる前、洛陽に向けて晋陽を出立する528年３月以前に住んだとみられる。従って王椿が528年３月に爾朱氏軍閥集団がはじめて上洛するために并州（晋陽）を発つ前に、頭領爾朱栄と既に深い関係があったことは、明らかである。王椿

が爾朱栄の孝荘帝擁立の功績が認められて封建されて食邑を賜与されたことは、両者の関係を裏書きする。王椿の妻魏氏（鉅鹿郡魏悦の次女）は、爾朱栄の妻元氏（北郷郡長公主）から深く礼敬された。このことは、王椿と爾朱栄が家族ぐるみで親しい関係にあったことを彷彿させる。（『魏書』93王椿伝・『北史』92同伝）

王綽は、９世祖が王横、曾祖父が王橋、祖父が王諶、父が王翔、大伯父が王叡であり、王椿は父王翔の従兄弟である。孝荘帝代528年５月に爾朱栄が北道大行台に就くと、北道大行台尚書吏部郎に任命された。孝荘帝奉戴の功勲により、猗氏県開国侯に封ぜられ、食邑五百戸を賦与された。孝荘帝代530年には、綽州刺史に除せられたが、赴任しなかった。（『魏書』93王綽伝）爾朱栄と王椿に比肩するくらい特別深い関係を結んだ痕跡は認められないが、爾朱栄と良好な関係を結んでいたことは確かである。

以上太原郡の王氏が孝明帝代から孝荘帝代にかけて爾朱栄と友好関係を結んでいたことを確認した。王椿は第１次上洛を果たした528年４月以後も太原郡太守を占め、王綽は北道大行台尚書吏部郎に就いており、爾朱氏軍閥集団の本拠地である覇府地区内の并州（晋陽）において、同集団を支える役割を担っていた。かかる点から、同軍閥集団構成員と認めてもよいであろう。爾朱栄の死去後、爾朱兆が代わって并州（晋陽）に居座った後も、王綽は覇府地区の并州刺史に任ぜられており、爾朱氏との友好関係は続いていたことは確かであろう。（『魏書』93王綽伝）王氏ほど爾朱栄と深い関係を結び、爾朱氏軍閥集団の中に入った漢族士人は、他に見出すことはできない。

孝荘帝代において太原郡の王氏の如く、爾朱氏と特別良好な関係を結んでいたとは行かなくとも、控え目にみてつながりを保って対立関係に陥らないでいた、あるいは上記の対立関係を生じた隴西郡の李氏・弘農郡の楊氏に比べて相対的にみて友好関係にあった漢族士人が、孝荘帝代末期に爾朱氏との関係が対立の極に達した洛陽において認められる。鉅鹿郡の魏子建・魏収父子である。

魏子建は、曾祖父・祖父が不明、父が魏悦、子が魏収・魏祚、母が李氏、娘婿が李仁曜、妹魏氏が王椿の妻である。隴西郡李氏との関係は、浅からぬものがあった。娘婿李仁曜の父李虔は李承の子で、李沖の甥に当たり、李韶・李神

儁・李延寔とは従兄弟関係にある。孝明帝代正光年間（520～525）に洛陽から東益州刺史に転出する以前、前軍将軍であった10年間に、吏部尚書であった李韶や爾朱栄の暗殺を積極的に進めた李彧の父李延寔とともに、しばしば弈棊を指した仲であった。また529年に爾朱兆が邢杲の乱を平定した後、李彧が大使として、東土を撫慰しに赴く際、殷賑を極めた門前の送客の群の中に混じっていた。孝明帝代末期あるいは孝荘帝代初期に東益州刺史から洛陽に帰還した後、常侍・衛尉卿を歴任し、孝荘帝代において外戚として隆盛を極めた隴西郡李氏から近い所に身を置いていた。しかしながら李氏に対して完全に同調していたわけではなく、むしろ醒めた眼で眺めていたことが、以下の逸話から看取される。上述した如く、529年に爾朱兆が邢杲の乱を平定した後、李延寔の子李彧が大使として、東土を撫慰しに赴く際、外戚として貴盛を極めていたが、門に溢れた送客の中にいた魏子建が李延寔に対して『ますます盈満を以て誡と為せ。』と餞別の辞を送った。530年に孝荘帝が爾朱栄を暗殺した後、河陰で爾朱氏の凶刃に斃れた人々の遺族は弔賀したが、自身の娘婿李仁曜も河陰で害されたにも拘わらず、素直に喜ばず、爾朱氏の勢力が依然として衰えず、暗殺後の計画が成就せず、首謀者の李氏が禍難に遭うと、危惧の念を従弟の盧道虔に表明した。李氏とは姻戚関係にあったとはいえ、爾朱栄の暗殺には加わらなかった。孝荘帝代において最も親しく交わったのは、隴西郡李氏ではなく、母方の従兄弟盧義僖であった。（『魏書』104自序・『北史』56魏子建伝）隴西郡李氏とは、距離を置いていたとみられる。

魏収は孝荘帝代には先ず司徒記室参軍を授けられ、ついで530年に北主客郎中に除せられた。隴西郡李氏とは、隴西郡の李仁曜が義兄弟であったことから、姻戚関係にあった。孝荘帝代に司徒記室参軍に任命されたのは、吏部尚書であった隴西郡の李挺（李神儁）が魏収の才学を重んじ、上奏して推挽したからに他ならない。李挺（李神儁）は、李延寔とともに李仁曜の父李虔の従兄弟である。司徒記室参軍に就いた時期は精確に定めることはできないが、孝荘帝代528年４月より以後、530年９月以前であったことは確かである。司徒記室参軍であった期間に、属僚として仕えた可能性がある司徒就任者は、元徽（在任期間：528年４月～529年閏月）・楊椿（在任期間：528年４月～528年９月）・李延寔

(在任期間：529年８月～530年12月より前)・蕭贊（在任期間：528年５月より後～529年11月）である[22]。

魏収を推挙した李挺（李神儁）は、吏部尚書であった時に、爾朱栄が曲陽県令に用いようとした人物を、階が及んでいないことを理由に任用しなかったところ、爾朱栄の怒りを買い、朋党を立てて勲人を排除・抑圧していると非難され、自ら申し出て辞職した。(『魏書』39李神儁伝・『北史』100序伝）孝荘帝代に司徒に就いた以上の４名中、元徽は上述した如く、後に爾朱栄の殺害に直接手を染めた。他の３名は直接爾朱栄の暗殺に関わった様子は窺えないが、暗殺実行者の身内として爾朱氏からは敵対者と目された。楊椿は、兄楊播の子楊侃が爾朱栄の暗殺に加わっており、郷里華陰に引退した翌年531年に、爾朱天光に殺害された。(『魏書』58楊椿伝）李延寔は子の李彧が暗殺に関与しており、司徒の後刺史として出た青州において、爾朱栄の暗殺後に上洛した爾朱兆により害された。(『魏書』83下李延寔伝・『北史』100序伝）蕭贊は、孝明帝代525年に梁から北魏に亡命した後、孝荘帝代に入って司徒に就き、その後太尉を経て、斉州刺史に出た。その間、洛陽において孝荘帝の姉壽陽長公主を娶った。恐らく爾朱栄の暗殺時には斉州におり、爾朱兆が入洛した時に斉州城民の趙洛周に逐われた。壽陽長公主は捕らえられて洛陽に押送され、爾朱世隆に陵辱されようとしたが、操を守って害された。蕭贊は沙門となり、斉州の長白山・営州の白鹿山・相州の陽平郡を転々とした。(『魏書』59蕭贊伝・『北史』29同伝）魏収が属僚として仕えた可能性のある人々は、暗殺に直接関わった元徽はもとより、他の３名のいずれも爾朱氏との間には対立を生じる可能性を秘めていたのである。魏収は、義兄弟が李仁曜であり、司徒記室参軍に推薦したのが李挺（李神儁）であった点からみて、爾朱栄暗殺に関与した隴西郡李氏とは親しい立場に立っていたと思われる。また属僚として爾朱氏との間には対立を生じる可能性を秘めていた、いずれかの人物に仕えた。それにも拘わらず、父魏子建同様、爾朱栄暗殺に加担した様子はなく、暗殺後も爾朱氏に殺されることもなかった。孝荘帝代において、爾朱栄暗殺の首謀者に加わった隴西郡李氏を積極的に支持し、同調したとは言えない。(『魏書』104自序）

他方爾朱氏との関係であるが、魏子建・魏収父子が積極的に関わった痕跡は

認められない。しかしながら、魏子建の妹の魏氏を介して少なくとも対立関係には陥らなかったとみられる。妹の魏氏は、上述した如く王椿の妻であった。魏氏は、爾朱栄の妻元氏（北郷郡長公主）から深く礼敬された。兄魏子建が罹患した時には駆けつけた。（『魏書』104自序）甥に当たる魏子建の子、魏収を我が子同様に可愛がった。（『魏書』93王椿伝・『北史』92同伝）魏氏が、爾朱氏と対立した隴西郡李氏と姻戚関係にあったにもかかわらずそれと距離を置く魏子建父子と爾朱氏との間に立って緩衝役になっていた可能性がある。隴西郡李氏が首謀した爾朱栄暗殺に加担せず、その後爾朱氏に害されることなく、孝武帝代にまで生き延び、533年に63歳を以て世を去った。（『魏書』104自序）子の魏収は、北魏が東西に分裂した後東魏において生を全うした。（『魏書』104自序）爾朱氏に反抗する態度を取らなかった上、爾朱栄の妻元氏（北郷郡長公主）から深く礼敬された妹あるいは叔母の魏氏が守ったが故であるかと推察される。鉅鹿郡の魏子建・魏収父子は、姻戚である太原郡王椿夫婦を介して、爾朱栄、さらに爾朱氏、そして爾朱氏軍閥集団との間で、少なくとも敵対関係に陥らない程度の、比較的良好な関係が成立していたものと思われる。

魏氏一族の他の成員に目を向けると、魏収の族叔魏蘭根が爾朱世隆に孝荘帝の爾朱栄暗殺計画があることを密告したことが認められる。530年９月の暗殺成就後は密告したことを孝荘帝に知られるのを恐れて、孝荘帝の信を受けていた応詔王道習を通して洛陽から出て勲功を立てることを求めた。その結果定州へ河北行台として派遣されて并州（晋陽）から殷州に出る要衝である井陘において爾朱氏軍閥集団の軍を防ごうとしたが、同年10月幽州から南下してきた、爾朱氏に忠誠を尽くす侯淵に敗れて、渤海郡の高乾の許に奔り、翌531年10月信都で蜂起した高歓の下で尚書右僕射に就いた。（『北斉書』23魏蘭根伝・『北史』56同伝）

魏収の族叔魏季景は、前廃帝代普泰年間（531年２月～531年９月）において洛陽で尚書郎であったが、尚書令であった爾朱世隆にその才能を賞愛されていた。魏季景と同様に爾朱世隆が親待されていた博陵郡の崔勉が就いていた尚書左丞を、爾朱世隆に竊かに求めて崔勉から奪って就いた。（『魏書』57崔勉伝・『北史』56魏季景）

魏蘭根の如く、孝荘帝代に爾朱栄暗殺計画を密告したり、魏季景の如く、前廃帝代に魏蘭根が信都において反爾朱氏の旗印を掲げた高歓の下に身を投じた後であっても、洛陽で爾朱世隆から厚遇されたりした点からみて、魏子建・魏収父子のみならず魏氏一族全体が、爾朱氏、さらには爾朱氏軍閥集団とおおむね友好関係にあったものと推察される。

以上孝荘帝代において、覇府地区では太原郡の王氏が爾朱氏軍閥集団と深い関係を結んだこと、洛陽では鉅鹿郡の魏子建・魏収が太原郡の王椿・王綽には及ばないにせよ、消極的な支持を与え、友好関係を結んでいたと考えられる。

これまで検討した事柄から、漢族士人は、孝荘帝代において爾朱氏軍閥集団主導の尊皇体制の支持者と反対者とに一応２分できる。前者に属するのは、覇府地区において同軍閥集団を支えた太原郡の王椿・王綽であり、消極的支持者とみられる洛陽に居た鉅鹿郡の魏子建・魏収である。後者は、洛陽において孝荘帝とともに爾朱栄暗殺に手を染めた隴西郡の李彧・李義邕、弘農郡の楊侃、中山郡の李晞（＝李侃晞）、太原郡の温子昇、高歓とともに反旗を翻した渤海郡の高乾・高昂兄弟である。さりながら、後者の場合、孝荘帝と爾朱栄との間が破滅した後に反爾朱氏の旗を掲げたのであり、その前は軋轢を生じたこともあったが、孝荘帝代において基本的には爾朱氏を中核とする爾朱氏軍閥集団の立てた、孝荘帝を頂いた尊皇体制に対して表立って反抗することはなく、服していた。そして爾朱氏軍閥集団、なかでも爾朱氏と孝荘帝との間に矛盾が生じた時に、爾朱氏ではなく孝荘帝を支持したのである。彼等は表面上であっても、孝荘帝が爾朱栄の暗殺を計画・実行するという決定的な対立状態に至るまで、爾朱栄主導の下で爾朱氏軍閥集団が孝荘帝を頂く尊皇体制に、爾朱栄と孝荘帝の関係が破綻するまでは従っていたのである。この点、注意したい。

結語－爾朱氏軍閥集団の王都－覇府体制と漢族士族

爾朱氏軍閥集団が構成員を覇府から派遣して山西・山東各地を扼えたことは、既に交通路線に沿って検証した。そして要地には行台を設置したことも、確認した。なかでも、山西地域の覇府地区（并州・肆州・汾州、雲・恒・朔・燕・蔚・顕の６僑州も含む）の并州（晋陽）と京畿地区の京師洛陽を２大中心地と

して結ぶ、太行山脈西麓の并州（晋陽）－洛陽路線を中心軸として、定州大行台を置く定州州城（安憙城）を含む、太行山脈東麓の幽州－洛陽路線がそれに次ぐ重要な路線として支配体制を構築していたと論じた。太行山脈東麓の幽州－洛陽路線は、漢族士人の淵藪の地山東地域の西端を走っている。また漢族士人の居住する関隴地域にも、爾朱天光の率領する部隊を派遣し、雍州に拠点を置いて同地域を抑えた。

前廃帝代高歓は精強な軍を抱えていた爾朱氏に対抗するために、自身が爾朱兆の許から率領してきた、旧六鎮出身の北族系兵士を主体とする部隊とともに、山東地方の農村部に蟠踞していた漢族士人を糾合して軍に組み込み、宇文泰は強大な軍団を擁していた高歓と張り合うために関隴地方の農村部に拠点を置いていた漢族士人から軍事上の協力関係を取り付けた[23]。山東・関隴両地方のいずれの漢族士人も、協力した背景には、北魏宗室への忠誠心があったものと考えられる。東西両魏政権は、軍事上の実力者が、いずれも尊皇体制下で、胡族のみならず漢族、とりわけ農村地帯に蟠踞する漢族士人の軍事力も結集して政治的実権を握った。

ところが、後年の高歓・宇文泰と同様に、爾朱栄が爾朱氏軍閥集団全体を主導してこぞって山東・関隴両地域の漢族士人と軍事面で積極的に協力する体制を作り上げようとはしなかった[24]。その結果、東西両魏政権に比べて農村部に対して恒久的な影響力を及ぼし得なかったと考えられる。爾朱氏軍閥集団の構成員であった侯淵は、529年７月に同集団が洛陽を２ヶ月程度占拠していた元顥を排除すると、爾朱栄の命を受けて、前年に鎮定された葛栄集団の残余勢力で、薊城に蟠っていた韓楼一派を討平した。平定後、平州刺史・大都督に任命され、范陽郡郡城に鎮した。爾朱栄の死後、范陽郡太守であった地元の漢族士人であった盧文偉の示唆により狩猟に誘われて范陽郡郡城を出た隙に、盧文偉によって閉門されて同城から閉め出された。帰るところを失った侯淵は、爾朱栄のために范陽郡の南で哀を挙げて、同郡に留まることなく、南下した。（『魏書』80侯淵伝）盧文偉のかかる行為は、爾朱栄と孝荘帝が対立した後に行われた点からみて、孝荘帝を支持する尊皇意識から出たものと思われる。とするならば、侯淵の例は、爾朱氏軍閥集団構成員が派遣先各地を治める上で、宗

室元氏出身の皇帝を支持する、当該地に根を張る漢人名族の協力が不可欠であったことを示唆する。そして漢人名族の協力を得るためには、尊皇体制を必要としていたと考えられる。爾朱氏軍閥集団下の王都－覇府体制とは、皇帝元氏直属の近衛軍に替わって、胡族系武人を吸収して精強な軍事力を擁した同軍閥集団が軍事上の理由から本拠地を王都以外の地并州（晋陽）・肆州に設けて、胡漢両族に対して、政治的正当性を確保すべく、皇帝元氏を頂いた尊皇体制に他ならない。王都－覇府体制と組み合わさった尊皇体制こそ、同軍閥集団が兵員として統率下の軍に組み込んだ胡族はもとより、その率領する軍事力に編まなかった漢族士人に対してもその支持を取り付ける上で不可欠な体制であったと考えられる。爾朱氏が北魏の実権者の座から滑り落ちる前後から、爾朱氏軍閥集団から枝分かれした軍事勢力は相互に元氏を皇帝に擁して張り合った。孝荘帝の死後、爾朱氏と袂を分かった高歓は、挙兵直後後廃帝を立てて、先ずは元曄を、ついで前廃帝を頂いた爾朱氏に対抗し、上洛後孝武帝を改めて擁立した。関隴地域において爾朱天光の部隊を賀拔岳の死後引き継ぎ、高歓に対抗した宇文泰は、高歓による掣肘を嫌って洛陽から遁走してきた孝武帝を迎え入れ、孝武帝薨去後は文帝を擁した。孝武帝を逃した高歓は、孝静帝を新たに立てた。さらに東西両勢力は、ともに農村部に蟠踞する漢族士人の軍事力を吸収しながら、張り合った。かくの如く、各々魏斉禅譲革命・魏周禅譲革命に至るまで、約20年に亘って軍事の統率者が元氏出身の皇帝を擁した尊皇体制を敷いて覇を競ったのが、東西両魏政権である。かく見来たると、爾朱氏軍閥集団は、東西両魏の王都－覇府体制とともに、それと表裏一体となっていた、軍事上の実力者が元氏の皇帝を擁立する尊皇体制を立てた先蹤であるとともに、農村部の漢族士人の軍事力を自身の傘下の軍に組み込んで国家体制を立てる前段階にあったと言える。（完）

注

(1)　（　）内の表は、すべて拙稿「北魏孝荘帝代爾朱氏軍閥集団再論(1)－王都－覇府体制を焦点にして－」（『琉球大学法文学部紀要　日本東洋文化論集』15　2009年）掲載。

(2) 祝総斌「関於北魏行台的両箇問題」(『周一良先生八十生日紀念論文集』中国社会科学出版社　1993年、のち『材不材齋文集－祝総斌学術研究論文集』(下)〔中国古代政治制度研究〕　三秦出版社　2006年) 参照。

(3) 孝荘帝代ではないが、爾朱栄の死後、前廃帝代において、爾朱世隆の兄弟及びその子らが、各々強兵を擁して、各地で残虐を極める掠奪を行ったという。(『魏書』75爾朱世隆伝・『北史』48同伝) 爾朱世隆の兄弟及びその子らが各地で強兵を擁していたとは言うものの、各地において勢力を張っていたのは、爾朱栄との関係から見て、爾朱栄の従弟爾朱仲遠・爾朱世隆兄弟、同じく従祖兄の子爾朱天光、同じく従子の爾朱兆であった。彼等の駐在地は、具体的には、爾朱世隆は京師洛陽、爾朱天光は関中、爾朱仲遠は大梁、爾朱兆は并州であった。(『魏書』75爾朱仲遠伝・『北史』48同伝) この中、爾朱世隆が洛陽において尚書令であったのを除き、いずれも各地の大行台に就いていた。爾朱天光は雍州で関西大行台に、爾朱兆は并州で北道大行台に、爾朱仲遠は大梁で三徐州大行台に各々就いていた。爾朱天光が関西大行台に就いた時期も、爾朱兆が北道大行台に就いた時期も、いずれも爾朱栄の死後、前廃帝代であった。(『魏書』75爾朱天光伝・『北史』48同伝、『魏書』75爾朱兆伝・『北史』48同伝、『魏書』75爾朱仲遠伝・『北史』48同伝) 爾朱仲遠は三徐州大行台に就任したのは孝荘帝代であるが、前廃帝代には徐州の彭城郡郡城から陳留郡の大梁城に移っていた。(『魏書』75爾朱仲遠伝・『北史』48同伝) 爾朱氏が各地で強兵を擁して、残虐を極める掠奪を行ったと言うのは、各地の大行台において長官として立ち、各行台管轄下の州郡から獲得した税収物を用いて配下の駐屯軍を養った事態を指すものと考えられる。前廃帝代に爾朱氏が各行台において徴税して駐屯軍を養ったことに対して、史乗には非難の口吻を以て記述されているが、前廃帝代に爾朱氏が長官として主導していた行台のみならず、孝荘帝代において爾朱氏以外の爾朱氏軍閥集団構成員が長官として統轄した行台においても、同様に管轄下の州郡から徴収した税により麾下の駐屯軍を養ったと推察される。

(4) (　) 内の表は、すべて注(1)拙稿に掲載。

(5)　『読史方輿紀要』41　山西３　平陽府

「曹魏置（平陽）郡於此、襟帯河（水）・汾（水）、翼蔽関・洛、推為雄勝。（略）蓋地大力強、所以制関中之肘腋、臨河南之肩背者、常在平陽也。」平陽府は、晋州である。

(6)　『読史方輿紀要』14　北直５　定州

「(定）州憑鎮・冀之肩背、控幽・燕之肘腋。関山峻阻、西足以臨雲・代。川陸流通、東可以兼瀛海。語其地勢、亦河北之雄郡也。」

『魏書』58楊椿伝・『北史』41同伝によると、定州には当初８軍を駐屯させた。１軍当たり、兵士5000名、主帥46名であり、８軍全体では兵士40000名、主帥368名に上った。その後中原を平定するのに伴い、８軍の兵力を南に転進させ、１軍当たり僅か1000余名となったが、８軍で、兵士8000余名、主帥368名の体制が、孝明帝代に楊椿が定州刺史となった時に、４軍を廃して、主帥184名を減らして、４軍で兵士4000余名、主帥184名に削減するまで存続した。

(7)　以下の２研究を参照。

①　佐久間吉也「曹操の漕運路形成について」(『社会文化史学』13　1976年、のち『魏晋南北朝水利史研究』　開明書院　1980年)

②　史念海『中国的運河』(陝西人民出版社　1988年　106～109頁・116～119頁)

(8)　以下の３研究を参照。

①　村田治郎「鄴都考略」(『中国の帝都』　綜芸舎　1981年)

②　史念海『中国古都和文化』(中華書局　1998年　130頁)

③　市来弘志「魏晋南北朝時代における鄴城周辺の牧畜と民族分布」(鶴間和幸編著『黄河下流域の歴史と環境ー東アジア海文明への道』〔学習院大学東洋文化研究叢書〕　東方書店　2007年)

③の市来氏の研究は六朝時代の鄴城の歴史全般を視野に入れて、その生業及び居住者の出身民族を中心に論じている最新のものである。

(9)　注(8)②史氏書70～71頁

(10)　注(8)③市来氏研究では、４～５世紀初頭において、鄴城一帯では農業が衰

退し、小規模な農業が営まれていたにしか過ぎず、当地では弱体化した農業と並行して牧畜が営まれていた可能性を指摘している。もし農業生産に関して、市来氏の推測が正しいとすれば、崔吉らの発言は、利用度の低下した灌漑用水路を再利用し、それにより当地の農業生産量が増大する可能性を示唆していたと解釈できる。

(11) 『読史方輿紀要』49　河南４　彰義府
「(彰義) 府山川雄険、原隰平曠、拠点河北之襟喉、為天下之腰膂。」彰義府は、相州に相当する。

(12) 『読史方輿紀要』29　南直隷11　徐州
「(徐) 州岡巒環合、汴 (水)・泗 (水) 交流、北走斉・魯、西通梁・宋、自昔要害地也。」

(13) 『読史方輿紀要』22　南直隷４　邳州
「(邳) 州北控斉・魯、南蔽江・淮。水陸交通、実為衝要。岡巒環合、汴 (水)・泗 (水) 交流、北走斉・魯、西通梁・宋、自昔要害地也。」
この他、厳耕望遺著『唐代交通図考』６ (中央研究院歴史語言研究所 2003年　2112頁・2135頁) 参照。

(14) (　) 内の表は、注(1)拙稿に掲載。

(15) (　) 内の表は、注(1)拙稿に掲載。

(16) 侯景は、前廃帝代532年４月に高歓が入洛して大丞相に就任し、翌533年正月に爾朱兆を倒して爾朱氏を覆滅するまでの間に高歓に降伏した。(『梁書』56　侯景伝) 侯景は孝荘帝代より後も532年４月と533年正月の間のいずれかの時点まで定州大行台長官に就いていた。即ち爾朱氏軍閥集団下において、定州大行台は528年10月から532年４月と533年正月の間のいずれかの時点まで存在した。

(17) 厳耕望『唐代交通図考５　河東河北区』(中央研究院歴史語言研究所 1986年　1441頁) 参照。

(18) (　) 内の表は、注(1)拙稿に掲載。

(19) 拙稿「爾朱氏軍閥集団考」(中国魏晋南北朝史学会・武漢大学三至九世紀研究所編『魏晋南北朝史国際学術研討会暨中国魏晋南北朝史学会論文集』

中国　武漢大学　2007年所収、のち中国魏晋南北朝史学会・武漢大学三至九世紀研究所編『魏晋南北朝史研究：回顧与探索－中国魏晋南北朝史学会第九届年会論文集』　湖北教育出版社　2009年所収）

⑳　拙稿「北魏孝荘帝代爾朱氏軍閥集団再論(3) －王都－覇府体制を焦点にして－」（『琉球大学法文学部人間科学科紀要別冊　地理歴史人類学論集』第１号　2010年）掲載。

㉑　注⒆拙稿参照。

㉒　以上の４名以外にも、洛陽ではなく長安に大行台として鎮した長孫稚も孝荘帝代529年11月から530年11月までの間司徒に就いていたことが確認される。（『魏書』25長孫稚伝）

㉓　以下の２研究を参照。

①　菊池英夫「北朝軍制に於ける所謂郷兵について」（『重松先生古希記念九州大学東洋史論叢』1957年）

②　谷川道雄「北朝末期の郷兵について」（『東洋史研究』20－４　1962年、のち『隋唐帝国形成史論』　筑摩書房　1971年、『増補隋唐帝国形成史論』　筑摩書房　1997年）

㉔　爾朱氏軍閥集団構成員で赴任した地方において当該地方の士人と協力するどころか、抑圧した例が、認められる。徐州刺史・尚書左僕射・三徐州大行台を兼任した爾朱仲遠が、そうである。爾朱仲遠は赴任地徐州において、数多くの大宗富族を叛乱を企てていると誣告し、その家族や財産を没収した。（『魏書』75爾朱仲遠伝）

その一方で、漢族士人か否か疑わしいが、在地の有力者と軍事上合作した爾朱天光のような人物も、見られた。その協力相手が、隴西郡の李賢・李遠兄弟である。李氏は爾朱氏軍閥集団の一翼を担った、関中に派遣された爾朱天光の部隊に積極的に協力した。

李賢・李遠兄弟は孝明帝代524年６月に郷里の原州高平鎮に侵入してきた勅勒胡琮（＝胡琛）の率いる反乱勢力に抗してともに戦ったが、孤立無援の中で抵抗空しく高平鎮（のちの原州州城）は反乱勢力の手に落ちた。李遠が援軍を求めて洛陽に赴き入朝したが、李賢は原州に留まり、再興の機

を窺った。李遠は孝荘帝代530年２月に爾朱天光が万俟醜奴討伐のために入関した際には精兵を配されてその郷導役を務めて再び戻り、同年４月に爾朱天光が万俟醜奴を平定した後、李賢はこれに呼応し、同年６月に万俟醜奴の一派であった万俟道洛をその占拠していた原州州城（旧高平鎮）から駆逐して、爾朱天光の部隊を迎えて同城を奪った。さらに爾朱天光部隊のために、馬1000匹を供出した。爾朱天光の都督長孫邪利が原州刺史に任命されるや、その主簿に除せられた。間もなく万俟道洛の軍勢が押し寄せると、長孫邪利が原州州城（旧高平鎮）内から内応した万俟道洛一派に害せられ、万俟道洛の原州州城（旧高平鎮）への進入を一旦は許したが、李賢は郷人とともに防戦に努め、撃退した。さらに達符顥が率いて原州州城（旧高平鎮）に迫ってきた反乱勢力と昼夜抗戦した後、同城を脱けて間道を通って雍州に走り、爾朱天光に援軍を要請し、応諾を得た。原州州城（旧高平鎮）に戻った後、援軍が間もなく到着する報せを聞いた達符顥の一団は退いた。（『周書』25李賢、『周書』25李遠・『北史』59同伝）その後李賢・李遠兄弟は、孝荘帝代・元曄代を通して、前廃帝代532年３月に爾朱天光が高歓と戦うために関東に向かうまでの間、爾朱栄が孝荘帝に暗殺され、孝荘帝が爾朱兆により扼殺された後も、爾朱天光との間に対立関係が生じた様子は認められず、爾朱天光との間に協力関係が続いたと考えられる。

李賢・李遠兄弟が爾朱天光と手を結んだ理由は、李遠が原州を侵した、勅勒胡琮（＝胡琛）の率いる反乱集団に抵抗しようとしていた時に、盛んな勢いを見せる敵を前に動揺して異議を盛んに唱えた郷人に説いた言辞から窺い知ることができよう。その発言とは、次の通りである。『この頃、皇室は事件が多く、悪人どもが隙に乗じて、その毒を思いのままに撒き散らしている。天子側の策は巧くいかず、その誅殺を先延ばしにしている。今がちょうど忠臣が忠誠を守る時であり、義士が功績を立てる日である。男たるもの困難に直面してただ逃れさえすれば好いというものではなかろう。窮境でこそ活路を見出すべきである。諸君は代々忠実で正義に順い、礼教の恩恵を被ってきた。今もし同姓同族を捨てて異姓異族に従い、道理に背

き、悪に染まったならば、五尺の子どもでもまだ非難するかも知れない。どんな顔で天下の士に見えるのか？異論のある者はこの剣で斬ろう。』（『周書』25李遠伝）と北魏皇帝への忠誠を尽くすよう、郷人に訴えており、忠誠意識から反乱集団に対して抵抗したことを物語る。そして孤立無援な中で原州州城（旧高平鎮）が反乱集団の手に落ちた後、ともに抵抗した人々が多く殺害されたが、李賢・李遠兄弟は反乱集団の手から逃れた。李遠は兄李賢から離れて援軍を依頼すべく洛陽に向かって出立するに際して、李賢に向かって、援軍依頼のために洛陽に上る旨とともに、洛陽から『王師』が来た場合、表裏相応ずることができると述べた。（『周書』25李遠伝）結局、李賢・李遠兄弟にとり、『王師』とは、孝荘帝代孝荘帝と爾朱栄の関係が破綻する以前に洛陽から派遣されてきた爾朱天光の部隊に他ならなかった。また爾朱栄が暗殺された後も李賢・李遠兄弟と爾朱天光、そしてその部隊との協力関係は変わった様子はない。恐らく、前述した如く、爾朱天光は表面だけではあったが、孝荘帝から派遣された朱瑞から慰喩を受け、頻りに異心のない旨を上奏し（『魏書』75爾朱天光伝）、爾朱氏中唯独り孝荘帝の官爵を受けて、孝荘帝の懐柔に応じており、孝荘帝と爾朱栄の関係が破れた後も、李賢・李遠兄弟にとり爾朱天光の率いる部隊は相変わらず王師であり、自身の忠誠意識を発揮する協力相手であったと考えられる。（完）